



日本の電子業界を巻き込む技術流出

奥野 和義*

今回の執筆に当たり、今業界で話題が沸騰していますシャープの経営再建と日本独自の液晶技術の流出について私見を交えて述べさせていただきます。

日本の工業会の再編と世界に通用する技術を集約し高収益企業に投資する産業革新機構と台湾系 EMS の世界トップ企業である鴻海精密工業の一騎打ちになりました。その結果、多額の支援額を提示し、IGZO（酸化物半導体）技術を次の有機 EL 開発に展開でき、「シャープ」の名が将来まで残るという提案で鴻海精密傘下となりました。この鴻海精密は、元々プラスチックの成形加工業でしたが、この成形金型技術を高めるため、日本の金型技術屋を採用し金型からプレス、切削技術などすべての製造技術を内製化し一貫生産で大量の製品を組み立てる EMS 企業となりました。特に、アップルの iPhone のアルミ筐体は、鴻海子会社の中国工場で最新鋭の日本製ロボットを大量に購入し精密切削加工しているのは有名なお話です。スマートフォンに搭載される電子部品、チップ抵抗、カメラモジュール、センサーモジュールなどは独自技術を保有する日本のメーカーが供給しています。これらすべてを鴻海社内では調達できません。それなりの蓄積された先進技術が必要となるからです。できるとすれば、筐体など外装加工技術です。アップルは 2018 年発売の機種には有機 EL を採用するのではないかと、そのデザインは曲面かも知れない、有機 EL は韓国 LG 電子の独断場。2 社購買からその技術革新が望めるシャープが狙い目と見たのではないのでしょうか。また、シャープが持つブランド力の高い空気清浄機のみならず、センサー技術や独創的なコンシューマー製品の開発力を高く評価したものと思われます。またポストスマートフォンとする自動車関連事業への進出を目論んでいるのでしょう。

さて、グローバル観点から俯瞰しますと企業の継続発展が何よりも優先すべき課題になります。企業存続ありきに注視するあまり、本当に日本に残さなければならない技術まで海外流出されるのは本末転倒です。村田製作所は国内ですべて生産し、技術流出を防いでいるのは有名な話です。ただ、海外ライバルに追いつかれないよう、次世代に向け開発の手を緩めず、メーカーに対し常に新規開発品を提案できる体制をとられています。また、日本の製造業の生産性（労働者一人当たりの付加価値生産）は高く決して海外に劣っていないことを認識しなければなりません。

エレクトロ実装技術からみると、個々のノウハウを積みかさねた部品はシステムパッケージという入れ物に封入し、特性、品質を売り込む方式を取るべきです。そのパッケージは、日本特有の高度精密加工技術を駆使し微細化・小型化したものです。もう一度「アイデアものづくり」に魂を吹き込むよう期待します。企業のトップは、業界の移り変わろうとする新しい「におい」を嗅ぎ取り、積極的かつ迅速な経営判断をされるよう望みます。